4331

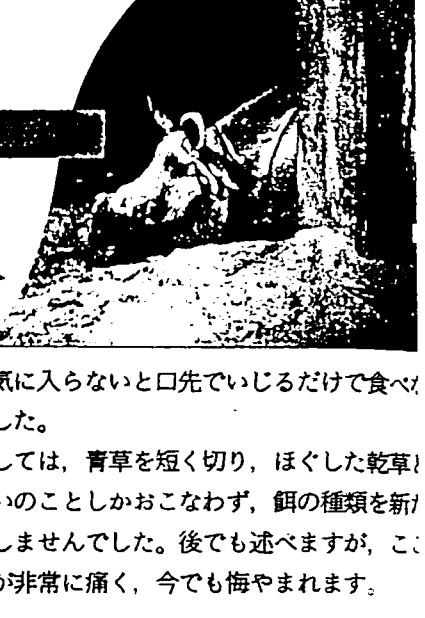
Animals and Zoo 1991 ?

●――――飼育レポート

インドサイ

“ラニー”の長い夏

老齢個体を飼育して



多摩動物公園
細田孝久

Tama's Indian Rhinoceros Lanny Falls Sick
by Takahisa Hosoda, Tama Zoo.

●高齢の“ラニー”

多摩動物公園では，現在オス・メス2頭のインドサイを飼育しています。オスの“多摩王”は，1958年インドより来園，メスのラニーは，1961年にやはりインド政府から寄贈され，それ以来30年間あまり多摩動物公園で飼育されてきました。特にラニーは来園当時10～15歳と推定されるので，現在は40～45歳ぐらいだと思われます。インドサイの寿命は45年といわれており，ラニーはかなりの高齢になります。

ラニーには来園前すでに1回（あるいは2回）の出産経験があります。多摩王との間にも2回繁殖経験があり，1967年に流産，1973年にはオスの子を産んでいます（「どうぶつと動物園」1974年2月号）。その後1979年から1980年にかけて膣に平滑筋腫が生じて，摘出手術をおこなっており，それ以来オスとは同居させずに飼育していました。

1989年6月から，ラニーは下痢と食欲不振による衰弱症を起こして，一時は起立もできない状態にまでなりましたが，快復して現在に至っています。今回は，このラニーの経過について報告します。

●経過と対応

前・飼育担当者の話では，ラニーは来園当初から食の細い個体だったそうです。私が飼育を引き継いだ1988年当時も，採食量はオスの3分の1に過ぎませんでした。また，糞も丸く固まらず，不定型のまま排泄していました。

写真1は，1988年7月の健康なときのものです。ちなみにインドサイの場合，あばらがうっすら出ているのが良好な状態といわれています。

それでは，ラニーの症状と，それに関しての対応について，日を追って見ていきたいと思います。

餌を残す……1989年5月

この時期から日によって残餌の多いことがありました。5月から入荷するようになった青草（イタリアンライグラス）も，噛んだだけで吐きだしたり，水のみの中につけてしまうことが増えてきました。また，草の質やにおいに対しても敏感になり，気に入らないと口先でいじるだけで食べないこともありました。

この状態に対しては，青草を短く切り，ほぐした乾草と混ぜ合わすぐらいのことしかおこなわず，餌の種類を新たに増やすことはしませんでした。後でも述べますが，ここでの対応の遅れが非常に痛く，今でも悔やまれます。

異状があらわれる……6月

こうして食欲不振の日が続くうちに，6月18日には糞が異様に臭かったり，血餅が付着したりとはっきり異状を示す兆候があらわれ，見た目にもやせていくのがわかりました。動きはよかったり緩慢になったりと日によってまちまちでした。採血検査の結果，栄養状態の低下，貧血（PCV血液中の血球成分の割合＝28%），肝機能の低下が認められました。下痢の日が多く，むしろ繊維質の餌を食べさせたいところで，あまり濃厚飼料（炭水化物や蛋白質の多い，穀物や根菜類など）を増やしたくはなかったのですが，ふかしイモやパン，おからなどをメニューに加えました。

全身の衰弱……7月

動きや便状はやや良くなったものの，貧血はいっそう悪化していました（7月8日でPCV26%）。ラニーは奥歯が完全にすり減ってしまっており，ほとんど歯茎でものを噛む状態になっていました。さらに全身の衰弱が加わり，噛んで飲み込むことが以前にも増して困難となったため，餌は柔らかく細かいものに限られました。青草は押し切りで10cmほどにきざみ，ヘイキューブは水に浸して与えました。この頃，一口の青草を飲み込むのに約100回そしゃくをしていました。

また，味に関しての好みはとてもうるさくなり，おからやふすまなどを最初は好んで食べても，続けているうちに徐々に採食量が減っていくので，黒砂糖を混ぜてだましだまし与えたりしました。そのうえ，数種類の餌をまとめて与えると，そのうちの1種類しか食べず，残りは口にしようとしないため，何回にも分けて1種類ずつ給餌しなければなりませんでした。このように，今までまったく気にしなかったようなことに対して，とても気むずかしくなったのも，老齢個体特有のものだと思います。

採食量もやや上向き，ビタミン剤等の皮下注射も週3～

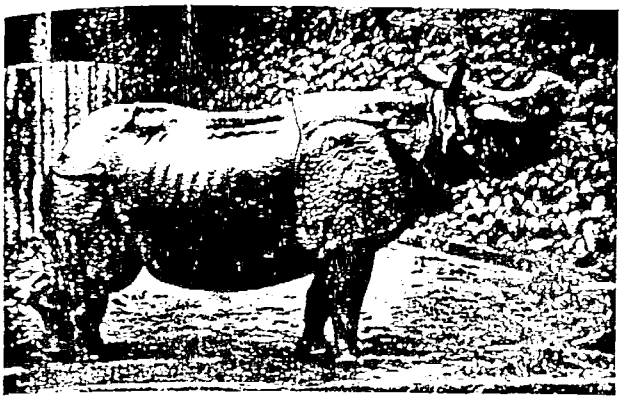


写真1　健康な頃のラニー（88年7月）
Lanny in her heyday.

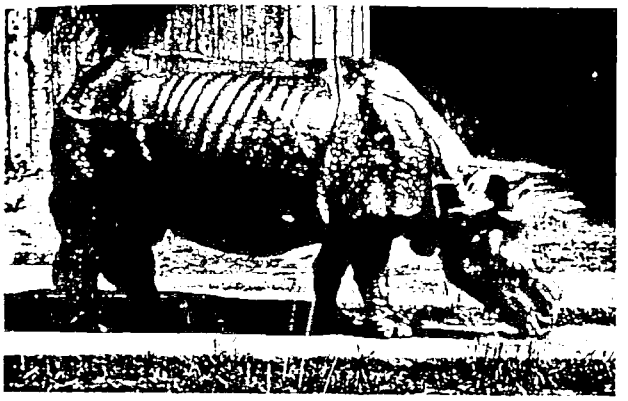


写真2　見た目にもやせたのがわかる（89年6月14日）
An emaciated Lanny.

写真3　舎内で横たわる（89年8月24日）
Lanny lays on the ground, unable to stand.

4回おこなったのですが，症状はなかなか改善されず，7月下旬にはPCV24%まで落ち込みました。

食べられるもので栄養補給……8月

暑い日が続く中，顔や，外部と触れることの多い身体の各所に傷が生じ始め，それがなかなか治らずにただれた状態になっていきました。見た目にも「骨と皮だけ」になってしまい，獣医師との相談の結果，下痢を止めることは考えずに，とにかく食うものを何でもよいから与えることにしました。それまでよく下痢を起こしていたクローバー，さらにバナナや炊いた押麦（圧べん大麦）も与えました。これらの採食状況や便状は思ったよりよかったのですが，皮膚のただれは膿をともなった潰瘍状となり，ひだの内側をはじめ全身に広がっていきました。栄養剤の静脈注射を耳から毎日おこなったのですが，潰瘍から栄養分が流出してしまうらしく，衰弱は続き，皮膚の治療には抗生物質入りの塗り薬も使用されました。

中旬以降，皮膚の状態が最悪になるとともに，動きも緩慢になり，歩行もゆっくりでボーッとしていることが多くなりました。写真2はその頃のものです。

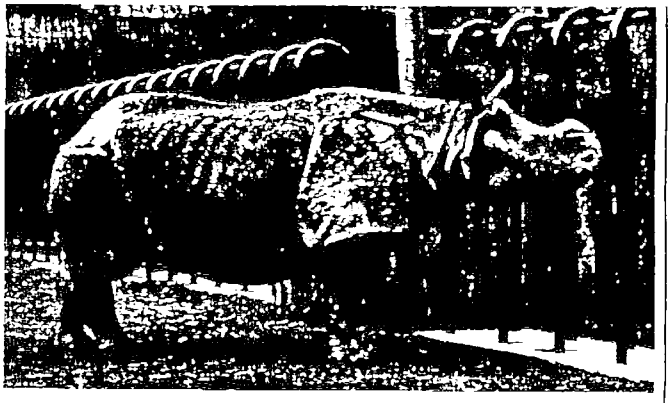


写真4　再び放飼場に出る（90年4月）
Lanny goes outside again, having regained almost completely her original weight.

そして，8月21日夕方に入舎しようとしたとき，前肢は立つのですが，身体を起こすことができない状態になってしまいました。刺激を与えると人に対して噛みつこうとするため，少し休ませて，その場で青草などを少しやると，1時間後に突然立ち上がり順調に入舎し，舎内ではいつも通り採食していました。しかし，翌日は朝から起立せず，横臥したままぐったりしており，かなりあわてさせられました。

この日から毎日4～5時間かけて多量のビタミン，栄養剤を静脈注射によって補いながら，嗜好性の高い餌の強制給餌をおこないました。特に好んで食べたのは，押麦と米に黒砂糖を入れて炊いたごはんに，おから，草食獣用ペレット，牛乳を混ぜ，ひとつ200gの団子にしたものです。これを口の中に入れてやると他の餌に比べて少ないそしゃく回数で飲み込み，短時間で約10kgも平らげてくれました。

このときから現在まで様々な餌を与えてみて，その嗜好性を調べたのが表1です。味覚的には，甘いものと苦いものに対して嗜好性が高いようです。表中の干しいたけ，茶の葉は鉄分が多く含まれているため与えたのですが，やはり好みませんでした。一方，同じ意味で与えたパセリは，現在でも高い嗜好性を保っています。

ラニーは起立できなくなってからも，何回か自力で立と

表1　ラニーへの給餌品目と嗜好性

イタリアン	○	ふかしイモ	◎	バナナ	◎	干しいたけ	×
クローバー	◎	ふかしジャガ	×	ウリ	○		
ソルゴー	×			メロン	○	茶の葉	×
		小松菜	△	リンゴ	△		
ヘイキューブ	△	白菜	△	ブドウ	○	クズ・サク	○
乾草	○	キャベツ	×	ミカン	◎	ラ・カシ等	
切乾草	◎	パセリ	◎	オレンジ	○	の葉	
				パイナップル	×		
草食獣用ペレット	◎	トマト	×	スイカ	×	カステラ	○
ルーサンペレット	○			キウイ	×	まんじゅう	○
飯類（押麦＋米＋黒糖＋草ペレ＋牛乳＋おから）	◎						
小麦	△						
ふすま	△						
おから	△						
パン	◎						

（注）イタリアン……イタリアンライグラス（青草）
ソルゴー，ルーサン……牧草の1種
ヘイキューブ……牧草等を干して圧縮したもの
ペレット……固型飼料
草ペレ……草食獣用ペレット

うとしたのですが，その度に横倒れになり，結局まる2日たって1度起立し，その後も2日間寝たままでまた起きるという繰り返しでした。この間は，餌として前述の団子とクローバーを，また水分はじょうろを使ってそれぞれ数時間おきに夜間も補給し，水は1日で約30ℓ飲ませることができました。写真3は，8月24日，起立できなくなって2日後のものです。

図1　採食量の変化（月平均）

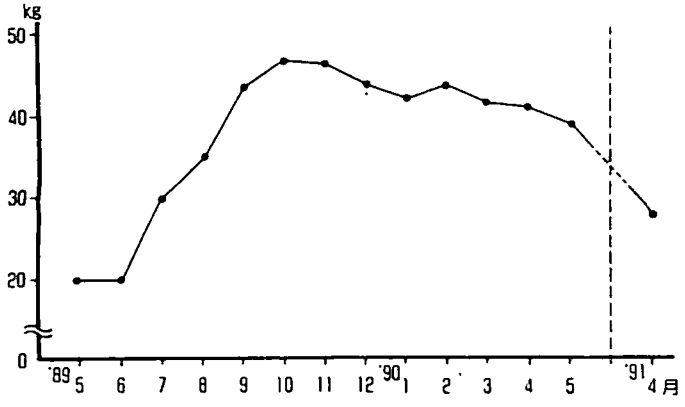
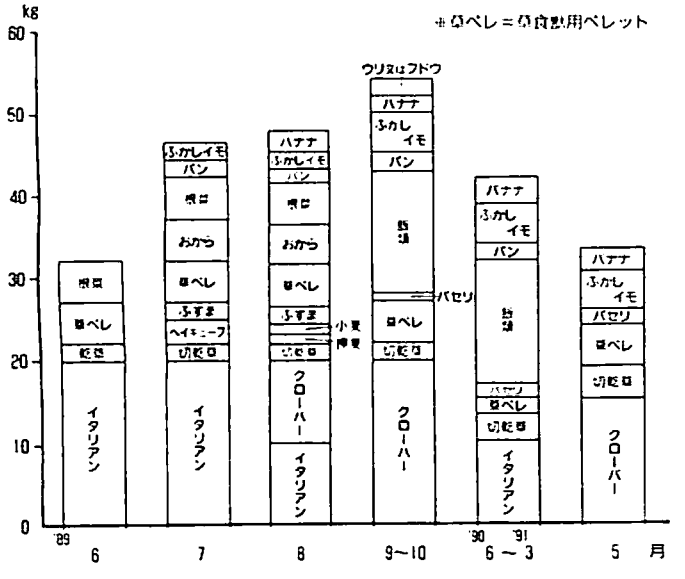


図2　給餌品目と量　期間中の1例を示す。



快方に向かう……9月

倒れて5日後の8月27日からは最低1日に1回は起立するようになり，9月に入ると食欲も皮膚の潰瘍も急速に快方に向かい始めました。しかし，血液検査では，PCVが8月末から21%まで下がり，極度の貧血状態を示しました。

9月7日からは，寝る起きるを頻繁におこなうようになったのですが，この頃から乳房や左右後肢に腫脹が認められるようになりました。しかし，動きはよくなり，9月10日には耳への静脈注射ができないくらい，速い動きを見せるようになりました。糞は，8月下旬以降ほとんど牛便状（ラニーにとっては良好便）で，9月中旬からは以前より決まっている場所に意識的に排泄するようになりました。また，下旬にかけて皮膚の潰瘍部が急速に小さくなり，腰のひだの内側からおこなっていた皮下注射も9月30日で中止しました。そして，10月には腫れもひき，皮膚もほとんど治ってやっとひと息つくことができたのです。

図1・2は餌のグラフです。起立不能から快方に向かっての3か月ぐらいに採食量が多くなっているのがわかります。涼しくなったせいもあるのでしょうが，それまでの分を取り返すように食い込み，その後はしだいに元の採食量に戻っていきました。給餌品目は，早いときには1～2日で変えていったため，その中の1例を示しました。なお，1日当りの摂取蛋白質量は，食欲不振を示した1989年6月には1460gだったのが，1990年6月には2056gに増え，今年91年5月には1850gとなっています。ちなみに現在オスは約2350gを摂取しています。

写真4は，1990年4月，約8か月ぶりに放飼場へ出したときのものです。ひかえ目に見ても太っており，一時は最悪の事態も覚悟しただけに，こうして再び放飼できたことは本当に大きな喜びでした。

●老獣を飼育して

飼育者の反省……

今回の例は，結局「老齢による食欲不振と下痢による衰弱症」と病名がついたのですが，改めて考えるとこれは防げたことではないかと思います。日常の動きや採食状況な

ラニーのメニュー。品目がふえて多彩に

写真5　乾草，青草，ペレットの他，ミカン，イモ，パンなどもたっぷり（90年4月30日）

写真6　特製「ごはん」（手前）の上方に定番になった1.5kgのパセリの束（90年5月31日）

写真7　切乾草，青草，ペレットが中心になっている最近のメニュー